

<研究報告>

グローバル冷戦史から見たクーデターの内幕

—クワメ・ンクルマの政治思想（三）—

阿久津昌三 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：ンクルマ，冷戦，クーデター，ガーナ，軍隊，警察

1. はじめに

クワメ・ンクルマ(1909-1972年)が、ガーナ本国でのクーデターを知ったのは、ホーチミンの招きでベトナムに行く途上、中国の北京に着いた時である。空港には劉少奇中国国家主席、周恩来首相をはじめ中国の党・政治指導者、北京駐在の各国外交官、北京の市民数千人がンクルマを出迎えた。この時までンクルマはクーデターが起きたことを知らなかった。ンクルマの戸惑いは『ガーナの闇黒の日々』(1968年)に読みとることができる(Nkrumah, 2001(1968))。それはンクルマを中国に先導した駐ガーナ中国大使との会話にも表現されている。

「ミスター大統領、悪い知らせがあります。ガーナでクーデターが起きました」

「何を言っているのですか。ガーナでクーデターですって」

「そんなことはあり得ないよ、まさか」

「しかし、本当です。それが起きたのです。実質的な革命的闘争に等しいものです」

クーデターとは武力による奇襲攻撃によって政権を奪取することである。アフリカでは、1965年6月のアルジェリアのクーデター以来、11月のコンゴ(レオポルドビル)、12月のダホメー(現在のベニン)と中部アフリカ、1966年にはいつて1月にオートボルタ(現在のブルキナファソ)、ナイジェリアと、そして中東のシリアで、次々と連鎖反動的にクーデターが起きるといふ現実があった。また、インドネシアにおいても1965年9月にスカルノを擁護するために彼の親衛隊が起こした未遂のクーデター、その半年経った1966年3月にスハルトによるクーデターが起きている(倉沢, 2020)。

ンクルマは北京で記者会見を行っている。記者会見で「私は依然としてガーナ憲法のもとで国家元首である。私は間もなく帰国することになる」という声明を読みあげている。クーデターに関与した軍と警察には部署に戻るよう命ずるとともに、国民には平穏に、しかも断固としてクーデターに抵抗するよう呼びかけている。また、北京の迎賓館に滞在中していたンクルマは外部との接触を避け、ギニア、マリなどの同盟関係を結んでいる国々と協議にはいつている。

これに対して、北京のガーナ大使館は、2月26日の朝、新政府に忠誠を誓うとの趣旨の声明を発表している。「われわれは、ガーナ外務省からアクラで政変があったという知らせ

を受けとった。われわれは外交官であるから、われわれの政府につかえる」との談話を発表している。ンクルマはもはや北京の迎賓館のなかでも孤立無援の状態となっていた。ガーナ大使館に掲げられていたンクルマの肖像写真もすでに剥がされていた。クーデターは、当初、昨年クリスマス・イブにおこなうように計画されていた。ンクルマ大統領がアクラを留守にしなかったために中止にされていたのである。

私が初めてガーナに行った1981年12月26日のことである。その5か日後の12月31日、ニューイヤー・イブにジェリー・ジョン・ローリングス空軍大尉(Flight-Lieutenant Jerry John Rawlings)¹⁾によるクーデターが起きた。このクーデターも当初はまさにクリスマス・イブに計画されていたが、リマン大統領にその計画が漏れたのか、取り調べがあり、証拠がないので疑いは晴れ、それで中止されていた。

ローリングス空軍大尉によるクーデターは実は2度目で1979年にも彼は起こしている。この時には、彼はアクフォ中將を海外に送り出す儀仗兵の役をはたしている。大統領が海外に出かけ留守にする時、クーデターの絶好の機会になることが多いのである。ローリングス空軍大尉による「革命」(「これは『クーデター』ではない。『聖戦』である」とローリングス空軍大尉はラジオ演説のなかで述べた)の宣言とともに、憲法は停止され、国会も閉鎖され、政党も解散され「暫定国家防衛評議会」(PNDC)が設置された。

その時の野帳(フィールドノート)を読み返してみると、未明に起きたクーデターも終わり午前11時にはガーナのラジオ放送でガーナ国歌が延々と流れていた。午後6時には予告通りにローリングス空軍大尉による演説がラジオで流された。銃声が町に響きわたり、夜空には照明弾が炸裂して光を放ち、打ち上げ花火を見るようにして新年を迎えた。午前2時頃まで鳴り響いていた。初めてのガーナで、初めてのクーデターの洗礼を受けた。

新年は午後6時から午前6時まで外出禁止令が出された。これはしばらく続いて午後7時まで、午後8時までと徐々に外出禁止の時間が縮められた。これはかなり長期にわたって続けられた(その後、軍事政権は約10年間続いた)。クマシはガーナ第2の都市といっても小さな町だから、夜になると銃声が鳴り響きわたり、不気味な軍隊の行動を想像したものだ。翌日に町の中で起きた事件の顛末を聞いた。「軍が教会を破壊した」のは「兵隊の妻の浮気」が原因だった。「妻の浮気に逆上した兵隊が教会を襲い、逆に教会員たちに惨殺されたことに対する仕返しだった」という噂も風の便りで耳に入ったものだ。

ンクルマに話を戻そう。ンクルマの後悔が顔に浮かぶようだ。そのンクルマに周恩来は、「あなたはまだ青年だ。あなたの先には、まだ40年ある」と語っている。周恩来がガーナを訪れる直前の1964年1月2日、一人の護衛兵がンクルマを負傷させるという事件が起きている。ンクルマの暗殺未遂事件を周恩来は知っていたのである。

ンクルマは2月25日、北京からギニアのセク・トゥーレ大統領に電報を送り、これに対して、セク・トゥーレは「あなたが私に寄せられた連帯と支持の親書に心から感動した」と返信して、ンクルマは「すぐにでも(ギニアの首都)コンクリを訪れたい」と伝えている。北京から遠いギニアでは、セク・トゥーレ大統領が「ガーナで24日に起きた軍事クーデタ

一は帝国主義者、新植民地主義者たちが企てた陰謀である」というンクルマ宣言に同調して、「われわれは、われわれ人民の威信のために最後の一人になるまで闘い抜き、アフリカの統一のために進むという決意を固めねばならない」と述べ、さらに、「われわれは最後には勝つ。外国の影響、陰謀、破壊工作、不正な人物たちから新たに解放される日を確実に目指さなければならない」という声明を出している。

ンクルマは、28日午後4時、劉少奇国家主席、周恩来首相に見送られ、ソ連のエアロフロート航空の特別機で北京を離れた。北京滞在中は国賓待遇であったが、到着のときとは違って、北京駐在外交団の見送りもなく約50人が見送るだけであったという。

モスクワではグロムイコ外相らの出迎えがあったが、モスクワ駐在のガーナ大使館からはだれも出迎えはなかった。モスクワのソ連政府首脳たちも、ガーナ新政権を承認するときには障害となることを懸念して、ンクルマが長期間滞在することを望んでいなかった。

3月2日にコナクリに到着し、セク・トゥーレ大統領はガーナ大統領として歓迎の意を示し、礼砲で迎えられ、ガーナ、ギニアの国歌の演奏のうちに、ギニア国旗に敬礼し、ギニア軍の儀礼兵を閲兵した。ンクルマは「私は再び政権をとるためにガーナに帰る途上にある。ギニアに来たのは、私が近くアクラに戻ることを世界に告げるためである」と演説をしている。ギニアに到着したンクルマは、セク・トゥーレが国家の指導権をにぎる地位を退いたことでガーナ大統領と兼任する形でギニア大統領に就任した。クーデターで失脚した一国の大統領が他国の大統領になる、前代未聞の前例のない事態となった。クーデターの後、親西洋色を濃くしたガーナ新政権と、それを承認するアフリカ諸国に対して「待った」をかけようとする苦肉の策と見ることができると報道されている。

ガーナ新政権を承認する動きは、リベリア、マダガスカル、ナイジェリアに次いで、イギリス、アメリカと、3月5日正午までに、17カ国が承認している。18日には、ソ連政府も「ガーナとの現在の両国関係を継続したい」との意向を伝えて新政権を承認している。ガーナの新政権は中国と国交を断交している。これは「冷戦の前半期」の終焉を意味するものである。

オッド・アルネ・ウェスタッドは1960年生まれのノルウェー人で、中国史を研究し、英米の大学で教鞭をとっている。彼はグローバル化を縦軸として冷戦史をとらえているが、アメリカとソ連という大国を超えて、中国やインドをはじめ、朝鮮半島、東南アジア、ラテン・アメリカ、アフリカ、そして中東という横軸の幅がとても広い座標軸で冷戦史をとらえている。

ウェスタッドは『グローバル冷戦史』(Westad, 2005)のなかで第三世界の革命家たちをとりあげて次のように述べている。

「第三世界の革命指導者となった多くの者の個人的体験は、長期にわたる投獄や亡命を通して形成された。彼らが用いようとした組織的手法や、彼らが創造しようとした国家のコンセプトの大半は、故郷から遠く離れた地での読書や会話を通じて形成された。彼らが自らの共同体に対して抱いた責任感、通常、自分が払わなければならなかった個人的犠牲に

よって、そして、共通の大義に殉じて拷問にかけられたり殺されたりした近親者や親しい友人の姿を目撃することによって強化された。多くの場合、そのような経験が生み出した目的意識と切迫感のために、第三世界の革命指導者は、権力掌握や新国家の急速な発展のために大きなリスクを冒すことをいとわなかった。彼らは、自らの使命を強く信じ、その究極的なコストがいかなるものであれ、成功は安価には手に入らないことを理解していた」（ウェスタッド、2010、p. 90）。

また、ウェスタッドは『冷戦—ひとつの世界の歴史』（Westad, 2017）のなかで、アルジェリアのベン・ベラ（1918-2000年）、ガーナのンクルマ、コンゴのルムンバ（1925-1961年）、エジプトのナセル（1918-1970年）、インドのネルー（1889-1964年）、インドネシアのスカルノ（1901-1970年）など第三世界の革命家を取りあげて次のように述べている。

「アルジェリアでは1965年6月、軍がベン・ベラ大統領に反旗を翻し、クーデターで彼を追放した。抵抗はほとんどなかった。アルジェリア人の大多数は、ベン・ベラは口ばかり達者で彼が掲げる計画には実行がともなっていないと感じていた。彼らが求めていたのは、自らの国家を求めてあれほど長く戦ってきた人々に目に見える成果をもたらしてくれる、より実際的で実利的な経済発展へのアプローチだった。人々が反発したのは、アルジェリア民族解放戦線（FLN）が掲げる計画の内容というよりは、むしろその実行がお粗末で、革命政権の新たなエリートたちがますます自己中心的になっていったことだった。軍のトップである国防大臣ウアリ・ブーメディエン率いる部隊は、ジッロ・ポンテコルヴォ監督の映画『アルジェの戦い』の撮影中にエキストラ役を務め、それを隠れ蓑にアルジェリアの首都を制圧した。ブーメディエンは演説よりも行動を約束した」（ウェスタッド、2020b、pp. 16-17）。

「ガーナでも同じようなできごとが起こった。ほぼ10年にわたりガーナの揺るぎなき指導者にして第三世界の代表的なスポークスマンであったクワメ・ンクルマは、1966年の軍事クーデターで倒された。ンクルマが国民のほとんどから支持を失ったのは、その経済政策がなかなか結果をもたらされず、彼がますます独裁的になっていったからだった。彼は1962年に最高裁判所長官を解任した。その2年後、彼はすべての野党を禁止し、ガーナを一党独裁国家にするとともに自らを終身大統領に任命した。ンクルマが中国と北ベトナムを訪問している間にクーデターは起こった。政権を奪取した軍将校たちは、差し迫った共産主義の支配からガーナを救うのが彼らの目的の一つであると主張した」（ウェスタッド、2020b、p. 17）（一部改変）。

「インドネシア内で緊張が高まるにつれ、スカルノは不安を感じさせる政治状況をむしろ楽しんで見えた。彼は1965年を『危険とともに生きる年』と呼び、政治と経済の変革にさらなる力を注ぐようになった。この無謀さが彼の破滅をもたらすことになった。1965年の夏、スカルノは従来軍に加えて武装した人民による民兵組織を併設することを提案し、幹部将校たちは狼狽した。その一方で共産主義者たちは、スカルノを診察する中国人医師団からの情報に基づいて、大統領の健康状態への懸念を抱いていた。スカル

ノがいなくなれば、将軍たちは再び共産主義者たちを攻撃するだろうと彼らは推測した。インドネシア共産党（PKI）が先制攻撃をしかけた。彼らは共産主義者である下級将校たちのクーデター計画を承認した。このクーデターは1965年9月30日に実行され、6人の将軍が殺害された。しかしスハルトに率いられた残りの将軍たちは反撃し、ジャカルタを制圧した。将軍たちはスカルノを『保護』するとともに、インドネシア共産党を非合法化した」（ウェスタッド、2020b, pp. 23-24）（一部改変）。

第三世界の革命家たちについては新たな資料が公開されるようになって事実関係が明らかにされるようになった。特に、アルジェリアのベン・ベラ、ガーナのンクルマ、インドネシアのスカルノなど革命家たちについては全体像が明らかになっている。

本稿は、アフリカを舞台に脱植民地化と、帝国主義の最終段階としての新植民地主義と闘った革命家ガーナのンクルマをとりあげ、特に、1966年2月24日のクーデターによるンクルマ政権の転覆の事例をもとに、グローバル冷戦史のなかのもうひとつの歴史を明らかにすることが目的である。

2. クーデターの民族誌

1966年2月24日のクーデター（以下、「2・24クーデター」と略す）は未明に起きた。国家解放評議会（National Liberation Council, 以下NLCと略す）は「クワメ・ンクルマにまつわる神話は、すでに崩れ去った-----。彼は祖国を私有財産のように支配してきた-----。気まぐれな経済問題の処理によって-----。この国は経済的に破綻に追い込まれた-----。われわれは数日中に、この問題を解決する対策を発表する。われわれの未来は明るい」とラジオで声明を出している（National Liberation Council, 1966, p. 466）。

クーデターの実行部隊の将校たちはンクルマ政権を打倒する軍事介入を行なった背景について著書を執筆して説明している。これらの著書には、A・A・アフリファ大佐（Colonel A. A. Afrifa）の『ガーナのクーデター』（1966年）とA・K・オ克蘭少将（Major-General A. K. Ocran）の『神話は崩れる』（1968年）のものがある（Afrifa, 1967(1966); Ocran, 1968）。ここでは、これらの著書を「クーデターの民族誌」と名づけておこう。これらの対極にあるのが反クーデターを意図して、あるいはクーデターを予防するために執筆されたのがンクルマの『ガーナの暗黒の日々』（1968年）及び『革命的内戦ハンドブック』である（Nkrumah, 2001(1968); 1969(1968)）。さらに、NLCのラジオ放送などを収録した『ガーナの再生—暴政の終焉』（1966年）という官報がある（The Ministry of Information 1966）。

ここでは、アフリファ大佐の『ガーナのクーデター』とA・K・オ克蘭少将の『神話は崩れる』をとりあげることでクーデターはどのように計画され実行されたのかについて考えてみたい。

2.1 アフリファ大佐の『ガーナのクーデター』（1966年）

本書の献辞は「J・W・K・ハーレイ警視総監、E・K・コトカ少将と自由を獲得するために闘ったすべてのガーナ人に」と書かれている。「序」はK・A・ブシア（K. A. Busia）に

よるもので、ブシアはイギリスに亡命していてオクスフォード大学聖アントニオ・カレッジに所属していた(人類学のラドクリフ＝ブラウンのもとで社会学を学んだ学者でもある。後にNLCが民政移管して第2共和制で大統領になることになる)。ブシアは「若い人たちを代弁して言えば―彼はほんの30歳にすぎない」と驚きをみせ、「ンクルマが支配していた時期、われわれの父の世代は彼らの魂と良心をお金で売ってしまった。彼らは育てられた大組織を口先だけで敬意を払った。彼らはガーナ情勢の管理を誤り、遺産を浪費し、土地を乱用したのだ。その結果として、神から与えられた自由は失われた。われわれが起こした違憲の軍事行動の目的はこの自由を獲得することであり、真の民主主義がうまくいくための諸条件と環境をつくるためである。これがわれわれの防衛である」と述べて絶賛している(Busia, 1967(1966), p. 10)。

本書は、「はじめに」に続いて「1966年2月24日の話」「子供時代、学校そして軍に入る」「独立とその余波」「コンゴの話」「ガーナの状態」「ガーナの軍人」「待ちうけているもの」「あとがき」という章立てからなる。「はじめに」はタイボー・スザムエリィ(Tibor Szamuely)が執筆している。タイボーはンクルマ政権の時にウィネバのイデオロギー研究所の上級講師をしていた人物である。当時リーディングス大学で教えていた。

アフリファ(Akwasi Amankwa Afrifa)は1936年4月24日にアサンテのマンポンという町に生まれた²⁾。彼はマンポンの最高首長の系譜関係にある(クマシの「黄金の椅子」に次いでマンポンには「銀の椅子」がある。アサンテ第2のポストである。つまり、アフリファは後に説明することになるが、クーデター計画を実行するためには必要な人物だった)。

父方はマンポンの語り部の系譜で父親は石工を職業としていた。母方はマンポンの王族につながる系譜にあり母親は学校に行ったことがないと書かれている。母方のオジは二人とも第82西アフリカ師団に所属し伍長まで昇進した。ビルマ前線に参戦した。アフリファの兄はガーナ警察の警察官だった。父方のオジは犯罪捜査課、後にンクルマ政権で公安部の長だった。2・24クーデターの時、(死んでいるのか生きていないかわからない)オジを連行するよう連隊に命令したのは不愉快な思いをしたと語っている。

家業を継げばよいという父親と、学校に通わせたいというオバとの間で争いのなかで、1943年にマンポンの長老派学校に通うことになる。建築に没頭したりして学校にとどまることに気乗りがしなかったと語る。しかし、1948年に寄宿学校に通うことになった。進学するために奨学金に応募して、1951年にいくつかの選択肢のなかからケープコーストのアディサデル大学に通うことになる。施設付き牧師の家に住み込んだ。ラテン語、ギリシア語、宗教的知識、歴史、英語、地理の科目でクラスのトップとなった。「私に賞を授与してくれたのは誰だと思う。とりもなおさず、クワメ・ンクルマ! だった」と語っている。ンクルマは言ったという。「若者よ、がんばりなさい。あなたの成績にはとても感銘を受けた」と。アフリファは「ンクルマが2月24日の実行にも感銘を受けることを希望したい」と語っている。

科目がひとつ修得できなかつたので授業料等の返還義務が生じ軍に入団することを決め

た。1957年に士官候補生としてガーナ軍に入隊し、テシエの正規将校特別訓練学校に入学する。同期の中で5名がさらにサンドハーストの王立士官学校で訓練するように選ばれた。オールダーショットのモンス士官候補生学校の予科を経て1958年にサンドハーストに訓練、1960年に卒業し、ハイズの歩兵学校を経て母国に帰っている。1961年にライフル中隊の指揮官となり、1962年から1964年まで参謀幕僚将校、1964年にテシエの国防大学校に勤務し、1966年に少佐として第2歩兵大隊を指揮していた。クーデターの翌日、大佐となる。その後、アフリファは出世と隠遁を繰り返すが、1979年にローリングス空軍大尉が率いる青年将校たちによってアチャンポン大佐、アクフォ中将とともに処刑された(阿久津, 2001)。

2.2 オ克蘭少将の『神話は崩れる』(1968年)

本書の献辞は、「故E・K・コトカ少将、妻アグネスと子供たち、ガーナ軍に」と書かれている。コトカは本書が出版される前の1967年4月17日にンクルマを政権に戻そうという軍事たちによる反クーデターで殺害された。

本書は「はじめに」「ガーナ軍の背景」「ンクルマの暴政」「大統領護衛部隊」「軍一墮落の始まり」「クーデターの計画」「計画と混乱」「作戦の始まり」「作戦の終了」「回顧」「将来」の章立てからなる。なお、オ克蘭は陸軍参謀長にまで昇任している軍人であるが、軍事介入と軍事政権の諸問題に関して『剣の政治』という題名の個人的回顧録を執筆している(Ocran, 1977)。

A・K・オ克蘭(Albert Kwasi Ocran)は3人姉妹に続いて長男として1929年7月21日にケープコーストから北へ50マイルにあるブラクワという町に生まれている。アゴナ・克蘭のファンテの出身である。まさに学齢期となるかという5歳の時に母、2、3年後に父を亡くしている。母方のオジや義父の援助で学校に行くが中退する。畑仕事を手伝って2年間家で過ごす。学業を続けたいという希望は捨てきれなかった。また、試験にも成功した証拠に奨学金がもらえたことでも明らかだと語っている。1943年にケープコーストにいる父方のオジ³⁾が優秀だという噂を聞きつけて援助してくれることになる。1944年にアクラのセントジェームズ学校に復学する。オ克蘭少年は昼休みに兵舎の軍人たちを訪問するのが日課だったと語っている。第2次世界大戦が終わり、兵隊たちがビルマから帰国していた。第81、82西アフリカ師団の兵隊たちである(これらの師団はインパール作戦で日本軍と戦った部隊である。なお、ガーナの軍施設は「ビルマ基地」とよばれている)。軍人に憧れるオ克蘭少年の姿が目につかぶようだ(Ocran, 1968, pp. xii-xiii, xv-xvii)。

アチモタ学校に進学できる学力もあったが、オ克蘭は1947年に16.5歳で王立西アフリカ前線軍(RWAF F)に入隊している。23歳で第3歩兵大隊の士官候補生。1953年にガーナ、ナイジェリア、シエラレオーネの青年から選抜されて、テシエの正規将校訓練学校(ROSTS)、その後、チェスターのイートン・ホールで訓練を受けている。1954年に歩兵部隊の将校となる。コンゴ危機には国連軍に参加している。1962年にはキャンバリーの王立参謀学校に入学し、帰国後に国防省の参謀幕僚将校(行政職)となり、1964年に第6歩兵部隊を指揮する。その後、大佐として第1歩兵旅団を監督する。クーデターの翌日、少

将に昇進している。

最終ポストは中将まで登りつめるが、1971年8月に引退している。新しい職をもとめると語っている。「剣」から「ペン」へ持ち替えて、1971年から1973年までオックスフォード大学リンカーン・コレッジに留学している。子供時代から念願だった学問の世界にはいることになる。オ克蘭は軍事介入と軍事政権の諸問題に関して『剣の政治』という題名の個人的回顧録も執筆している (Ocran, 1977)。畑仕事と地域の仕事が好きで軍人としては大往生ともいふべき90歳で亡くなっている。

2.3 将校という専門的職業

軍事専門職業 (military profession) は専門的職業集団としての軍隊というものを前提として使用されるものである。その具体的な担い手は軍人または軍人グループである。サミュエル・ハンチントンは『軍人と国家』(1957年)のなかで将校の専門技術、将校の責任、将校制度の団体的性格に分けて、専門的職業としての将校制について詳細に記述している (ハンチントン, 2008a)。

アフリファ大佐がサンドハーストの王立陸軍士官学校を卒業しているのに対して、オ克蘭少将はキャンバリーの王立参謀学校を卒業している。いずれも英国の伝統のもとで学んだ専門的職業人である。オ克蘭は「軍のなかの政治は軍をだめにするが、政治のなかの軍は国をだめにする」というペリー国防長官の言葉を引用している (Ocran, 1968, p. 2)。

1961年にイギリス人の軍司令官が解雇されたことが2・24クーデターの遠因のひとつになっている (Alexander, 1965)。ンクルマ大統領が軍事関係に影響力を行使しようとした。ンクルマは装備及び訓練を含む軍事援助をソ連、キューバまで広げ多様化を図った。また、国家建設事業のなかで軍をひとつの道具としてみなした。さらに、正規軍の指揮系統の外に独立した大統領護衛部隊を創出している。このような部隊は正規軍に十分に対抗できるほどの力をもっており、最新の装備や平均以上の設備、高い給料、そしてンクルマの同族によって指揮されている。正規軍は国際空港に隣接するビルマ基地を拠点とするが、その東側に大統領護衛部隊の基地があった。

アフリファ大佐とオ克蘭少尉はいずれも「軍用備品」について記述しているのが印象的である。大統領護衛部隊との格差が一目瞭然だったことがわかる。

「悪い計画、経済的運営の失敗、そして政治的干渉のために、この軍は装備が悪く能力をともなっていない。烏合の衆となり果ててしまっている。1965年のクリスマスには多くの軍隊は軍人の誇り・モラル・効率性に必要なもの——装備も着るものもなくなっていた」 (Afrifa, 1967(1966), p. 104)。

「私は兵士たちがいかにぼろぼろの制服を着て歩き回っているのかということを経験したところでも書いたことがある。実のところ指揮官がそんなことをすることは難しい。指揮官は高水準の着こなし、清潔さで知られてもいるし、慣らされているものだ。それでいて、彼らは破れた制服で行進に参加している兵士たちに何をできるというのか。磨いてもいない靴をはいた兵士たちに。(中略)。将校たちでさえ見苦しい制服を着て歩き回っていた。将校の

制服の布地には公認のものといったものがないから、将校たちは日本、アメリカ、カナダ、それどころかソ連製のカーキ色の制服を手に入れて着ているものがある。(中略)。モラルが落ちているのも驚くことではないのだ。正規の兵隊たちの自尊心も傷ついている。1965年のクリスマスには、状況は——危機的になっていた。部署の効果的な運営は不可能となり軍の作戦上の効率性もかなり落ちこんでいた」(Ocran, 1968, pp. 44-46)。

1965年7月、ンクルマは軍による政府転覆の陰謀の報告を治安局から受け、オトゥ少将(Major-General Steven Otu)とアンクラ少将(Major-General Joseph Ankrah)を解任し、軍幹部の入れ替えを行なった。ふたりの少将の解任はもうひとつの2・24クーデターの遠因となった。アフリファは「この行為の結果、ガーナの将校や下士官たちは、武装をした専門的職業の名誉が汚された。少将たちだけではなく彼らも侮辱されたと感じるようになった」(Afrifa, 1967(1966), p. 102)と語っている。軍事専門職業としての将校の名誉がンクルマによって踏みにじられたのである。

3. 「コールド・チョップ作戦」(Operation Cold Chop)

軍人の専門的職業は「暴力」を管理することである。将校の業務には、(1)この軍事力の編成、装備及び訓練、(2)軍事行動計画、(3)戦闘の中において、またその外にあって、その作戦を指揮することなどがある(ハンチントン, 2008a, p. 13)。

ンクルマ政権を転覆するクーデター計画は暗号名で「コールド・チョップ作戦」と名づけられた⁴⁾。クーデターの実行部隊のリーダーは総勢18名だった(その内、2名が警官であり16名が陸軍将校だった)。軍と警察との連合からなる。軍というのは独立後に組織された歴史的にも新しい組織であるのに対して、警察は植民地の時代から歴史があり権威もある集団である。しかも、警察の方が軍よりも大規模で、訓練や装備の点でも優れている場合が多いのが普通である。独立した1957年に警察組織はさらに拡大され、すでにあった機動隊に加えて、装甲車部隊が新設されている。また、通信システムもきわめて優れており、独自の通信網をもっている。ガーナの通信施設(1967年)は、固定無線局(短波・超短波の無線電話を備える)63局、送受信両用移動ラジオ局6局、携帯用無線局多数となっている(Luttwak, 2016(1978), pp. 105, 136)。

実行部隊は、(1)内部組織、(2)中間組織、(3)外部組織の3層構造に分類することができる。(1)内部組織は、警察関係2名、軍関係3名から構成される。警察のトップはジョン・コフィ・ハーレイ警視総監(John Kofi Harley, Police Commissioner)であり、軍のトップはエマニュエル・クワシ・コトカ大佐(Colonel Emmanuel Kwasi Kotoka)である。これらの組織はエヴェとよばれる民族集団で固められているのが特徴である。クーデターは1964年の早い時期に計画された。その年の終わりには警察幹部と陸軍の幹部たちからなる実行部隊が組織された⁵⁾。(2)中間組織は、クーデターについて少なくとも6か月前に知らされており、作戦の重要な役割をはたしている集団である。これもまたすべてエヴェで固められている。このメンバーは、第6大隊のアメヌ中佐(Lieutenant Colonel D. C. K. Amenu)

以外は、兵站と補給を担当している。どんなに優れた作戦計画と優秀な軍部隊があろうと、それを成立させる兵站と補給がなければ作戦は成功しない。行動開始時刻のH時まではローデシアでの軍事教練を行っていた。したがって彼らはクマシから選抜されている。(3)外部組織は2月24日までは作戦について知らされていないグループである。作戦が開始される数時間前というのがほとんどであった(Baynham, 1988, p. 155)。

2月23日(水)(午前)4時(0400hrs), タマレの駐屯地の第3歩兵大隊600人の兵士たちが35台のトラックで移動を始める。ローデシア作戦のテスト訓練ということで南下することだけが指示されていた。12時(1200hrs), コトカ大佐とアフリファ少佐はアテブブとエジュラとの間で兵士たちに合流した。コトカ大佐がハーレイ警視総監とオ克蘭大佐の実行を確認するためにアクラに向かった。そこでアフリファ大佐が指揮を執りクマシに向かう(なお、タマレとクマシの距離は237マイル, クマシとアクラの距離は168マイルである。タマレとクマシの間にアテブブ, エジュラがある。長距離交易の経路である)。クマシを避けて裏街道のエジュラからマンポンを経てアクラに向かうためには、アサンテのマンポン出身のアフリファ大佐を選んでいることはこの作戦にとって重要なポイントであったことがわかる。

24日(木)6時前にコトカ大佐がラジオ局に到着し、コトカ大佐はアフリファ少佐と握手を交わし「アクワシ, よくやった」と言ったという(Afrifa, 1967(1966), p. 34)。コトカ大佐は6時にラジオ放送を通じて次のように声明を発表している。いわゆる「夜明けの放送」である。

「ガーナの国民諸君。我々は警察との協力を得て軍がガーナの政権を掌握したことを告げる。ンクルマをめぐる神話は打破された。議会は解散された。ンクルマは大統領職を解任された。(中略)。全閣僚は解任された。会議人民党は解散された。同党に所属することは非合法となる。私は国民諸君に平静協力を訴える。拘束中のすべての人びとはやがて釈放されるだろう」(Afrifa, 1967(1966), pp. 34-35)⁶⁾。

オス城塞では何の発砲も見られなかった。大統領官邸での抵抗は高まり6時30分(0630hrs)には大統領護衛部隊, 官邸警備隊との小競り合いが続いている。コトカ大佐は警察庁本部で軍と警察との連携について調印している。国際空港, 郵便局, 電話局が占拠され, アクラに入る道路も封鎖された(Afrifa, 1967(1966), pp. 35-36)。大統領官邸, 大統領官邸前(現在, 革命広場), 大統領官邸の南側の道路の向かいにあるラジオ局, 大統領官邸の北側の軍病院に勤務するクワシエの家(作戦本部設置。大統領官邸まで数百ヤード), その北側に軍病院などを地図に書いてみると, これらの周囲には, 路上に止められたトラックによる封鎖線がどのようにはりめぐらされ, 「平服」の侵入グループ, 「陽動」グループ, 「援護射撃」グループ, 攻撃グループがどのように動いたのかが眼に浮かぶようだ。ローリングス空軍大尉のクーデターの時と同じような構造をとっている。絵図がとても似ているのはとても不思議である⁷⁾。

クーデター後ただちにNLC(国家解放評議会)が設置された。ガーナ軍司令官にはンク

グローバル冷戦史から見たクーデターの内幕

ルマによって陸軍副司令官の職を解かれたジョセフ・アングラー中將が任命された。議長にはアングラー中將，副議長にはJ・W・K・ハーレイ警視總監が就任し，このほか5人の軍部・警察関係者が委員となった。E・A・カクブ，G・E・O・ヌヌ，E・K・コトカ少將，A・K・オクラン准將，H・A・アフエリファ大佐たちである。

第1表 実行部隊の3層構造

氏名	階級	指揮	年齢	将校任命辞令	訓練校	民族集団
J.W.Harley	警視總監	警察	46	11.52	H	エヴェ
A.K.Deku	警視總監補	警察	43	03.53	H	エヴェ
F.K.Kwashie	大尉	軍病院書記	43	01.05.59	ROSTS	エヴェ
E.K.Kotoka	大佐	官	39	20.11.54	EH	エヴェ
A.K.Kattah	中佐	第2旅団 副官	33	11.02.56	EH	エヴェ
D.C.K.Amenu	中佐	第6大隊	37	11.02.56	EH	エヴェ
C.K.T.Tevie	中佐	兵站部長	37	25.08.56	EH	エヴェ
E.N.N.Dedjoe	少佐	補給部長	48	22.07.58	ROSTS	エヴェ
A.Avevor	大尉	補給次長	42	01.11.62	ROSTS	エヴェ
A.A.Afrifa	少佐	第2旅団	29	22.07.60	RMAS	アサンテ
I.A.Ashitey	少佐	クマシ駐屯	36	11.02.56	EH	ガ
J.T.Addy	中佐	地	39	04.06.55	EH	ガ
V.Coker-Appiah	少佐	タマレ駐屯	32	01.08.58	RMAS	ファンテ
A.K.Ocran	大佐	地	36	20.11.54	EH	ファンテ
L.A.Okai	少佐	エンジニア	31	16.12.55	RMAS	アクアピン
D.A.Asare	少佐	第1旅団	32	19.09.57	RMAS	アサンテ
R.J.Dontoh	大尉	第4大隊	36	21.03.58	RMAS	ファンテ
R.A.Achaab	大尉	第2大隊 偵察隊長 偵察次長	29	22.07.60	RMAS	ダゴンバ

(出典) Baynham(1988:161) (一部改変)

H:Hendon

ROSTS:Regular Officers Special Training School(Teshie, Ghana)

EH:Eaton Hall

RMAS:Royal Military Academy, Sandhurst, England

阿久津

第2表 インクルマ関連年表

1909	9・21	インクルマ，インクロフル村で生まれる。『自伝』では9・18	cf. 阿久津（2011）
1926		ハーフ・アンニの初等学校を卒業。初等学校で教生	
1927	7	クエギル・アグレイ，ニューヨークのハーレムの病院にて死去	
1930		アチモタ・カレッジ卒業。小学校教員となる	
1931		アミサノのローマ・カトリック学校初等科の専任教員となる	
1933	3	ローズベルト政権（1945・4まで）	
1935		アメリカに渡航。ペンシルベニア州のリンカーン大学入学	
1939		リンカーン大学卒業	
1940	5	チャーチル，首相に就任	
1941	8	ニューファンドランド沖で大西洋会談（ローズベルト大統領とチャーチル首相） 大西洋憲章	
	9	アフリカ人学生協会（ASA）に参加。1942年に会長となる	cf. 阿久津（2016）
1943		ペンシルベニア大学で修士号を取得する インクルマ，C・L・R・ジェームズに会う	
1945	4	トルーマン政権（1953・4まで）	
	5	イギリス，ロンドンに渡航。ジョージ・パドモアとユーストン駅で待ち合わせる	
	7	イギリス総選挙で労働党圧勝，アトリー政権成立	
	10	第5回パン・アフリカ会議，マンチェスターで開催（10・13～10・21） 国際連合発足	
	12	西アフリカ国民事務局（WANAS）を設立	
1946	3	チャーチル，「鉄のカーテン」演説	
	4	フェビアン植民地局「イギリスと植民地の人民との関係に関する会議」開催 1946-47年のイギリスの冬，大寒波。 「ロンドンの街のなかを歩き，石炭のかけらを探しまわった」（インクルマ）	
1947		ロンドンにて『植民地解放に向けて』を執筆する（1962年に出版）	
	3	「トルーマン・ドクトリン」発表	
	6	「マーシャル・プラン」発表	
	7	イギリスで総選挙	
	8	インドとパキスタンの分離独立	
	12	統一ゴールドコースト会議（UGCC）書記長就任のため帰国	
1948	1・30	ガンディー暗殺される	
	2・28	アクラ騒擾	
	3・12	インクルマ，オベツェビ・ランブティ，エドワード・アクフォ・アッド，ダンクァ，アコ・	

グローバル冷戦史から見たクーデターの内幕

- アジェイ, ウィリアム・オフオリ・アッタ, いわゆる「ビッグシックス」逮捕される
- 9・3 UGCC指導部, シンクルマを書記長から会計係に降格
- 1949 2・20 ソルトポンドの会議で, シンクルマとダンクァとの亀裂生じる
- 6・12 会議人民党 (C P P) 結成
- 10 中華人民共和国成立
- 1950 1・8 「積極行動 (Positive Action)」宣言
- 1・11 非常事態宣言
- 1・22 シンクルマ逮捕され, 3つの刑により懲役3年
- 2 マッカーシーによる赤狩り (マッカーシズム) 始まる
- 6 朝鮮戦争勃発 (1953・7まで)
- 10 中国人民義勇軍, 朝鮮戦争に出動する
- 1951 2・8 総選挙に獄中から立候補して当選。C P P 圧勝する
- 2・12 シンクルマ釈放され, 翌日, 総督から政府事務首班として組閣を命じられる
- 1952 2 ジョージ6世没, エリザベス2世即位
- 11 アメリカ, 水爆実験に成功
- 1953 1 アイゼンハワー政権 (1961・1まで)
- ニクソン副大統領, ジョン・フォスター・ダレス国務長官, アレン・ダレスCIA長官
- 3・5 スターリン死去
- 6・2 エリザベス女王の戴冠式
- 8 ソ連, 水爆開発を発表
- 1954 3 米, ビキニで水爆実験。第5福竜丸被災
- 5 ディエンビエンフーでフランス軍, 敗北する。フランスのインドシナ支配の終焉
- 6・15 総選挙でふたたびC P P 圧勝する
- 9・1 阿久津昌三, 栃木県の黒羽で生まれる
- 9・19 連邦制を主張するブシア, 国民解放運動 (N L M) 結成。再選挙を要求する
- 1955 4 チャーチルの引退にともないイーデンが首相に
- 4・18 アジア・アフリカ会議 (バンドン会議) 開幕 (4・24まで)
- 1956 2 フルシチョフ, スターリン批判演説
- 6 ポーランドで反ソ暴動
- 7・15 再選挙でC P P 圧勝する
- 7 ナセル, スエズ運河の国有化を宣言
- 9・18 イギリス政府, ガーナの独立付与を決定する
- 10 ハンガリー動乱
- 10 英仏軍エジプト攻撃, スエズ事件開始
- 11 イーデンがエジプトにおける英仏の軍事介入を中止
- 12 英仏軍スエズ撤退

阿久津

- 1957 1 中東政策に関する「アイゼンハワー・ドクトリン」発表
1 イーデンがスエズ事件の余波で辞任，翌日マクミランが首相に就任
3・6 ガーナ独立。ンクルマ，初代首相となる cf. 阿久津(2020)
ジョージ・パドモア，ンクルマの政治顧問となる（1959年に死去）
アーサー・ルイス，ンクルマの経済顧問となる（1958年にガーナを去る）
3・8 独立の2日後，国連総会で独立が認められ，ガーナは81番目の国連加盟国となる
6 ンクルマ，ロンドンの英連邦会議に出席。エリザベス女王にバッキンガム宮殿で謁見。
バルモラル御用邸に招待される
11 訪ソした毛沢東中国国家主席，モスクワで「東風が西風を圧している」と言明
12 第1回AA人民連帯会議（エジプト・カイロ）。ナセル。参加45か国
12・30 ンクルマ，ファシア・ハレン・リッツ（エジプトの女性）と結婚
- 1958 予防拘禁法（Preventive Detention Act）制定
2 シャルル・ド・ゴール将軍，首相就任
4・15 第1回アフリカ独立諸国会議開催（ガーナ・アクラ）（4・22まで）
10 ギニア独立。フランス共同体から離脱，ド・ゴールは離脱する国には援助をしないと断言
11 ガーナ・ギニア連合宣言
12・5 第1回全アフリカ人民会議開催（12・13まで）
- 1959 1 キューバでカストロ政権成立（キューバ革命）
8 第2回アフリカ独立諸国会議開催（リベリア・モンロビア）
9 フルシチョフ，訪米する
9・23 ジョージ・パドモア死去
- 1960 「アフリカの年」。アフリカの16か国が独立を遂げる
1・5 オッド・アルネ・ウエストアド，ノルウェーに生まれる
1 マクミラン首相，アフリカ歴訪
2 マクミラン首相による「変革の風」演説
2 フランス，サハラで原爆実験，成功をみる
3 南アフリカ人種暴動事件（シャープヴィル事件）
4 第2回AA人民連帯会議（ギニア・コナクリ）
6 第3回アフリカ独立諸国会議開催（エチオピア・アディスアベバ）
6・30 コンゴ独立。ルムンバの演説，ベルギーの国王の逆鱗に触れる
7・1 共和制に移行。ンクルマ初代大統領就任
7・6 コンゴ動乱勃発
7・15 ンクルマ，ガーナ部隊をコンゴに派遣する
9・23 ンクルマ，国連で演説
12 旧フランス領諸国会議（ブラザヴィル，モンロビア，カサブランカの3グループに分裂）
- 1961 1・1 ルムンバ暗殺される

グローバル冷戦史から見たクーデターの内幕

- 1・20 ケネディ政権 (1963 11・22 まで)
- 4・8 ンクルマ, 「夜明けの放送」
- 4 ケネディ, キューバ侵攻作戦を遂行するが, 失敗する。ピクズ湾事件
- 4 アルジェリア, 仏軍, 右翼反乱。フランス非常事態宣言
- 5 南アフリカ, コモンウェルスから脱退
- 8 ンクルマ, 中国を訪問する
- ンクルマ, W・E・B・デュボイスをガーナに招聘する。ガーナに帰化する
- 8 「ベルリンの壁」が構築される
- 9 ンクルマ, 第1回非同盟諸国首脳会議に参加する (ベオグラード)
- 10 ンクルマ, 200人のイギリス人将校・下士官を解任
- 11・13 エリザベス女王, ガーナ訪問
- 12・6 フランツ・ファノン死去。36歳
- 1962 ンクルマ, ソビエト連邦よりレーニン平和賞を贈られる
- 3 ケネディ大統領, 平和部隊を創設する
- 8・11 クルングルンでンクルマ暗殺未遂事件
- 10 キューバ危機。ケネディ, キューバ封鎖を命令
- 1963 2 第3回AA人民連帯会議 (タンザニア・モシ)
- 5・25 アフリカ統一機構 (OAU) 結成。『アフリカは統一しなければならない』出版
- 8・27 デュボイス死去する。ガーナの国葬となる
- 8・28 「ワシントン大行進」。キング牧師, 「私には夢がある」演説
- 11・22 ケネディ暗殺される。
- ジョンソン副大統領, 大統領に就任。ジョンソン政権 (1969 1・20 まで)
- 1964 1・2 大統領官邸でンクルマ暗殺未遂事件
- 1・11 周恩来, ガーナを訪問する (16日まで)
- 1・31 C P P一党独裁体制の成立
- 2・6 アンクラー中將, ラスク国務長官, マッコーンCIA長官と面談
- 5・10 マルコムX, ガーナを訪問する (5・15 ンクルマと非公式会談)
- 5・27 ネルー死去
- 10・15 フルシチョフ解任。後任にコスイギン首相, ブレジネフ第一書記
- 1965 1・24 チャーチル死去。国葬
- 2 ンクルマの政敵ダンクァ, 刑務所で死去する
- 2・7 米, 北ベトナムへの爆撃 (北爆) を開始
- 2・21 マルコムX暗殺される
- 2・26 ゲバラ, アジア・アフリカ会議 (アルジェリア) にて「帝国主義の死と道徳的世界の誕生」と題して演説
- 4・18 アジア・アフリカ会議 10周年記念式典

阿久津

- 5 第4回AA人民連帯会議開催（ガーナ・ウィネバ）
 - 6・19 アルジェリアでクーデター。ベン・ベラ大統領失脚
 - 6・25 アルジェのアジア・アフリカ会議場爆破される。中国外交の孤立と後退
 - 8 インド・パキスタン戦争勃発
 - 9・30 インドネシアでスカルノを擁護する未遂のクーデター。9・30 事件
 - 10 ンクルマ、『新植民地主義—帝国主義の最終段階』を出版する
 - 10・21 アフリカ統一機構（OAU）アクラ大会（10・25 まで）
 - 11 ローデシア，共和国として独立宣言
 - 1966 1・22 アコソボ・ダム操業開始
 - 2・21 ンクルマ，アクラ国際空港から中国，ベトナムに出発
 - 2・24 軍によるクーデター。ンクルマ失脚
 - 3・2 ンクルマ，ギニアに亡命。共同大統領として遇される
 - 3・11 スハルト大将によるクーデター。スカルノ大統領，退陣
 - 5 文化大革命の幕が開けられる
 - 7・17 ホーチミン，「抗米救国檄文」をラジオ放送
 - 1967 2 タンザニアのTANU党，アルーシャ宣言
 - 4・17 サミュエル・アーサー中尉によるクーデター未遂。コトカ少将殺害される
 - 8 東南アジア諸国連合（ASEAN）の結成
 - 10 ゲバラ殺害される
 - 1968 4 ンクルマ『ガーナの暗黒の日々』出版
 - 4・4 キング牧師暗殺される
 - 1971 ンクルマ，寝たきりの状態になる
 - 1972 1 アチャンボン将軍によるクーデターでブシア政権転覆
 - 4・27 ンクルマ，ルーマニアのブカレストで死去
-

注

- 1) ローリングス空軍大尉は，1966年にアチモタ高等学校を卒業し，1966年の2・24クーデターに触発されて入隊する。1967年にタコラディ空軍士官学校士官候補生となり，1969年に少尉，1971年に中尉，1978年に大尉に昇任している。1979年のクーデターによりアチャンボン軍事政権を打倒。軍事革命評議会（AFRC）設立し，議長に就任する。ただちに民政に移管する。1981年に再びクーデターによりリマン政権を打倒。PNDC設立し，議長に就任する。その後，約10年間の軍事政権を経て，民主化の動きのなかで1993年に第4共和制の大統領となる（阿久津，2020）。2020年11月12日に死去する。享年73歳。
- 2) 「私の両親は学校を出ていなかったのが私がいつ生まれたのかという正確な日付はわからない。われわれの伝統に従う通常の換算では1936年の種蒔きには少々遅い季節の日曜日

グローバル冷戦史から見たクーデターの内幕

だと推論できる」(Afrifa, 1967(1966), p. 43)。なお, Akwasi または Kwasi は日曜日に生まれた男の子に命名される名前である。Kwame は土曜日に生まれた男の子に命名される名前である。日常の会話ではアクワシとかクワメとかクワク(水曜日)で呼び合う。

3) オクランは「私の年長の父(my senior father), すなわち私の父の兄」と記述している。人類学の用語では類別的親族名称と呼ばれるもので「父」の兄弟も「父」である。

4) この暗号名をどのように翻訳すればよいのか。chop は西アフリカのピジン英語で「食べ物」を意味する。動詞では「食べる」という意味で, ガーナでは「人妻と寝たり」「賄賂をもらう」「職務上の不正な利益を得る」「うまい汁を吸うこと」などにも使われる。cold chop とは「すぐに簡単に食べられるもの」というほどの意味である(Baynham, 1988, p. 179; Price, 1975, pp. 117-124; Sumprim, 2011, pp. 183-186)。「冷や飯」とも訳することができる。

5) シンクルマ政権転覆計画にC I A(中央情報局)が関与していたことについては, ジョン・ストックウェルの『敵を求めて』(1978年)の回想録でも明らかになっている(Stockwell, 1978)。ストックウェルはC I Aのアクラ支局の活動についてとりあげて「ふんだんに使う予算が割り当てられており, クーデターを企てるためのために謀略作員と親密に接触するように保たれてきた。支局がどのように関与したかという点, クーデターが起きた時に秘匿されているソ連製の軍事装備を見つけることだった」(Stockwell, 1978, p. 201n)と証言している。これはアクラ支局長のハワード・T・バーンズが, アメリカが英仏と連携して立案し工作したものであることが明らかにされている。

また, この計画に関するアメリカ政府の機密文書は1999年に開示され, 忌諱されるべき事実の所在が明らかになりつつある。これらの資料には外交文書や諜報活動やF B I(連邦捜査局)の資料が含まれている。この文書は, 国務省「アメリカの外国関係—アフリカ, 第24巻, 1964—1966年」である(なお, 引用する場合には, 例えば, (Document 123)と表記する)。

1964年2月6日には, ディーン・ラスク国務長官とジョン・マッコーンC I A長官が, アンクラー中將に会いクーデター計画について打ち合わせをしている(Document 236)。これ以後, 英仏もアメリカと協調して, ガーナに対する経済援助を断ち切っている。人心の離反をうながしシンクルマ政権の崩壊を早めることが意図されていた(Document 237)。2月12日には, ワシントンにおいてシンクルマの処遇をめぐる会議が開催された。アメリカ側からジョンソン大統領, ラスク国務長官, ハリマン国務次官, 国家安全保障問題大統領特別補佐マクジョージ・バンディが, イギリス側からダグラス・ホーム首相と外交補佐官のバラーが出席している(Document 238)。2月26日には, マッコーンC I A長官, 彼の親友エドガー・カイザー, ウィリアム・P・マハニー駐ガーナ米大使が出席している。マハニーは会議後にアクラに戻り(Document 241; Document 242), 3月2日にはシンクルマと会談している。マハニーは「ガーナでのアメリカ政府の活動を管理していること, 在任期間中は絶対にいかなる謀略活動もなされないことをシンクルマに説明することができた」とワシントンに報告している。また, 主な謀略活動は「シンクルマのソ連・中国の友人たちを注意深く見つめること」

であり「ンクルマを叩き打たねばならない」と打電している (Document 244)。4月9日には、これに対応して、G・メンネン・ウィリアムズアフリカ事情担当国務補佐官が、ハリマン国務次官に「忍耐強くアメリカ政府とンクルマとの関係を維持するよう」に指示している (Document 250)。

1965年3月11日には、マッコーンCIA長官たちはマハニー大使を交えてンクルマ問題を協議している。「西側諸国の圧力はきわめて効果的であり、ガーナの世論も反発しており国家経済も危機的な状況にある」と大使は報告している。また、「クーデターが必ず起きるとは確信をもって言えないが、いずれにしても1年以内にはンクルマは職務には就いていないだろう」とも報告している。マッコーン長官は「クーデターが起きたらいったい誰が後継者となるのか」と尋ねており、大使は「軍事政権が取って代わる」と答えている (Document 251)。

バンディ (国家安全問題大統領特別補佐) の後任にはロバート・W・コウマーが就いた。1966年の新年早々に宥和政策をさらに進めるために、マハニー大使を本国に呼び戻し、それに替って、ンクルマのリンカーン大学の学友であるアフリカ系アメリカ人のフランクリン・H・ウィリアムズを大使に送り込んでいる。偽装工作に少しも手抜かりがなかった。ンクルマも新しい大使が着任した早々にクーデターが起きるとは予想していなかったようだ。『ガーナの闇黒の日々』のなかでも「フランクリンの背信行為は陰険な方法で実行した裏切りである」と批判している。

「アメリカ大使フランクリン・ウィリアムズは反逆者たちにクーデターを起こさせるために1300万ドルを提供したと公言している。(中略)。帝国主義者たちに自分自身を売り、このようなやり方で自分自身を利用することを許してしまうのは恥ずかしいことだ。この同一人物が『無血』クーデターだったと公に説明しているのは故意に嘘をついているのだ。しかし、彼の背信行為は陰険なやり方であったことを想起させてくれる。アメリカには『アンクルトム』という人物がいることで知られている。彼のような人物がいないことにアフリカの寛容さを見ることができる」(Nkrumah, 2001(1968), p. 49)。

6) ジョン・ドラマニ・マハマ (前ガーナ大統領) は『私にとっての初めてのクーデター—アフリカの失われた数十年の記憶から』のなかで次のように記述している (なお、献辞は「家族・人民・国家に奉仕して生きた、謙虚で誠実だった父E・A・マハマを追悼して」と書かれていて、著者の父はンクルマ政権の国務大臣だった)。

「それは1966年2月24日に起きた。僕は7歳でガーナの首都アクラにあるエリート寄宿学校、アチモタの小学校第2学年の生徒だった。(中略)。その日、神秘的で緊迫感に包まれた言葉一人々が話していた言葉のなかでも、クーデター(coup d'état)という言葉がお題目のように繰り返されていた。(中略)。子供の耳には、その言い回しが、上級生たちがしばらくして遊び始めることになったゲームのようで、胸をわくわくさせるように響いた。クーデター—それを初めて聞いた時からこの新しいゲームを習いたいと思うようになった」(Mahama, 2012, p. 7)。

7) ルトワックは『クーデター』の「2016年版へのまえがき」のなかで、「当然だが、初版を書いてからいくらかの変化があった。その一例が、クーデターの実行者が最初に『ラジオ局』を占拠しても、今日ではあまり成果をあげることができないという点だ。その理由は、きわめて小さな国であっても、ラジオ局はたった一つだけではなく、いまや10数局あるのが普通だからだ」と書いている（ルトワック，2018，p.1）。

謝 辞

本調査研究は、JSP科研費「アフリカ諸国における独立記念式典の変容過程に関する民族学的研究」（JP17K3279）（研究代表者 阿久津昌三）の助成を受けたものである。

文 献

- Afrifa, Colonel A.A. 1967(1966) *The Ghana Coup 24th February 1966*, London: Frank Cass and Company Limited.
- 阿久津昌三 2001 アサンテとエヴェの民族関係—独立後のガーナにおける国家政治を中心に，和田正平編，現代アフリカの民族関係，東京:明石書店，pp.116-139。
- 阿久津昌三 2011 クワメ・ンクルマの政治思想—『わが祖国への自伝』を読む，法学研究（慶應義塾大学法学研究会）84(6):297-332。
- 阿久津昌三 2016 ディアスポラの知識人たちとの出会い—クワメ・ンクルマの政治思想（二），法学研究（慶應義塾大学法学研究会）89(2):261-288。
- 阿久津昌三 2020 ガーナの独立記念式典の変容過程の事例を中心として，信州大学教育学部研究論集，14:72-83。
- Alexander, Major-General H.T. 1965 *African Tightrope: My Two Years as Nkrumah's Chief of Staff*, London: Pall Mall Press.
- Baynham, Simon 1988 *The Military and Politics in Nkrumah's Ghana*, Boulder and London: Westview Press.
- Busia, K.A. 1967(1966) "Preface," (in) Colonel A.A. Afrifa, *The Ghana Coup 24th February 1966*, London: Frank Cass and Company Limited, pp.9-10.
- Department of State, United States of America 1964-1968 "Foreign Relations of the United States, 1964-1968, Africa," 24, Department of State, United States of America (<https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1964-68v24/d262>) (2019年3月28日).
- ハンチントン，サミュエル 2008a 軍人と国家（上），市川良一訳，東京:原書房。
- ハンチントン，サミュエル 2008b 軍人と国家（下），市川良一訳，東京:原書房。
- 倉沢愛子 2020 インドネシア大虐殺—二つのクーデターと史上最大級の惨劇，東京:中央公論新社。
- Luttwak, Edward N. 2016(1978) *Coup d'Etat: A Practical Handbook* (Revised Edition), Cambridge (Massachusetts) and London: Harvard University Press.

- ルトワック, エドワード 2018 ルトワックの「クーデター入門」, 奥山真司訳, 東京:芙蓉書房出版。
- Mahama, John Dramani 2012 *My First Coup d'Etat: Memories from the Lost Decades of Africa*, London: Bloomsbury.
- The Ministry of Information, Government of Ghana 1966 *The Rebirth of Ghana: The End of Tyranny*, Accra-Tema: The State Publishing Corporation.
- National Liberation Council 1966 “Official National Liberation Council Statement Broadcast by Radio Accra on February 24, 1966, at 1300 GMT,” *African Research Bulletin* 1(28):466.
- Nkrumah, Kwame 1969(1968) *Handbook of Revolutionary Warfare: A Guide to the Armed Phase of the African Revolution*, New York: International Publishers.
- Nkrumah, Kwame 2001(1968) *Dark Days in Ghana*, London: Panaf Books.
- Ocran, Major-General A.K. 1968 *A Myth is Broken: An Account of the Ghana Coup d'Etat of 24 February 1966*, Accra: Longmans, Green & Co. Ltd.
- Ocran, General A.K. 1977 *Politics of the Sword: A Personal Memoir on Military Involvement in Ghana and of Problems of Military Government*, London: Rex Collings.
- Price, Robert M. 1975 *Society and Bureaucracy in Contemporary Ghana*, Berkeley: University of California Press.
- Stockwell, John 1978 *In Search of Enemies: A CIA Story*, New York: W.W. Norton & Co.
- Sumprim, Alba Kunadu 2011 *The Imported Ghanaian*, Accra: Marvik.
- Westad, Odd Arne 2005 *The Global Cold War: Third World Intervention and the Making of Our Times*, Cambridge: Cambridge University Press.
- ウエストッド, O. A. 2010 グローバル冷戦史—第三世界への介入と現代世界の形成, 佐々木雄太監訳, 小川浩之・益田実・三須拓也・三宅康之・山本健訳, 名古屋: 名古屋大学出版会。
- Westad, Odd Arne 2017 *The Cold War: A World History*, London: Allen Lane.
- ウエストッド, O. A. 2020a 冷戦—ワールド・ヒストリー (上), 益田実監訳, 山本健・小川浩之訳, 東京: 岩波書店。
- ウエストッド, O. A. 2020b 冷戦—ワールド・ヒストリー (下), 益田実監訳, 山本健・小川浩之訳, 東京: 岩波書店。

付 記

階級の名称は原則として1966年2月24日付けのものを、国家解放評議会(NLC)が設立された後は新しい階級の名称を使用した。また、日付は、ガーナ、アメリカ、イギリス、中国、日本等の時差を踏まえて、ガーナ標準時(経度0°)を使用した。注5)ではアメリカ東部標準時を使用している。なお、本稿は阿久津(2011;2016)の続編である。

(2020年 9月29日 受付)
(2021年 1月28日 受理)